

逆瀬川には、六甲山系のもろい花崗岩が削られた砂が流れ込んでいた。明治時代まではそれが、武庫川との合流付近で堆積し川床を上げ、大雨のたびに武庫川の水が逆瀬川に逆流して氾濫を起こし、本流の武庫川とともに逆瀬川も、「暴れ川」と呼ばれていた。この逆流が「逆瀬川」の名称の由来とも言われている。また、当時の川幅は200メートルほどの石河原であったので、「逆瀬川砂漠」などとも呼ばれていた。

明治25（1892）年は、兵庫県内で多くの水害が発生した年であった。この水害をきっかけに兵庫県は明治30（1897）年、逆瀬川において六甲山系初となる砂防工事を開始した。

工事は、大正時代を経て・昭和時代まで続き、昭和9年には、宝塚ゴルフ場の入り口付近から武庫川との合流付近までの約2kmに、日本最古の幅18メートルの玉石積流路工（川の中の流水路＝現在の逆瀬川）が完成した。



逆瀬川は、兵庫県砂防発祥の地であり、120年にわたり砂防とともに歩んできた。流域には日本近代砂防史上有数の構造物が多数現存し、砂防技術の歴史展示場のようである。明治・大正・昭和と続けられた兵庫県の治水事業の成功により、かつての「暴れ川」も現在は蛍飛び交う清流となっている。

※砂防：土砂災害を防止する手段の一つ。またその事業の総称。